

# 結核

第一卷 第一號

大正十二年三月二十四日發行

## 創刊ノ辭

日本結核病學會會長 醫學博士 北 里 柴 三 郎

結核病學會ノ機關雜誌「結核」創刊ニ當リコッホ先生ノ偉大ナル事業ヲ追慕シ茲ニ結核歴史ノ一端ヲ綴リ創刊ノ辭トナス。

肺病ノ症狀ニ就テノ記載ハ遠ク耶蘇紀元前ヨリ存セリ。既ニアリストトレス時代ニ於テ傳染性ナルコトヲ唱ヘラレタノデアルガ爾來結核ニ關スル知識ハ毫モ進歩セズシテ中古ニ及ベリ。十七世紀ノ中頃ジルヒウス氏出デ、結核ノ解剖的所見ニ注意ヲ注ギ結核「Tubercle」ハ本病ノ特異產生生物ナリト唱ヘタリ。十八世紀ニハランネック氏ノ肺癆竝ニ淋巴腺結核研究アリウイルヒョウ氏之ヲ承認シ結核病理ニ一條ノ進歩ヲ與ヘ西歷一八四三年ニハクレンケ氏ニ依リテ結核ノ傳染性ナリト云フ事實ヲ家兔ノ實驗ニ於テ證明シ一八六五年ウイلمان氏ハ之ヲ是認シ尙ホ肺結核患者ノ喀痰ヲ動物ニ吸入セシムル事ニ由テ肺結核ヲ發シ斃死スル事ヲ立證シ以テ肺結核ノ原因ニ病毒吸入說ヲ樹テタリ。コンハイム氏及ビサロモンゼン氏ハ家兔ノ眼前房結核接種試驗ニ成功シタル等結核ノ傳染試驗ハ漸ク完成セントシタルモ尙ホ一部ノ反對學者ハ遺傳說ヲ固守シ居レリ又々傳染說贊成者スラ各結核病竈ノ變化ニツキテ一元說ヲ主張スル勇氣ナカリシ然ルニコッホ先生ハ西歷一八八一年ヨリ結核ノ研究ニ從事セラレ種々ナル結核性材料ヲ多數ノ「モルモット」ニ接種シ常ニ同一病變ヲ呈スルコトニ注意シ之ヲ確メ結核ハ常ニ一定ノ生活體ニ由リテ惹起セラレザルベカラザルヲ信ズルニ至レリ而シテ結核ノ特異病變中ニ其ノ原因トナルベキ微生物ヲ發見セント努メ新鮮ノ結核結節ヲ粉碎シ塗抹標本ヲ製シ種々ナル色素液ヲ以

テ短時間又ハ長時間染色シ検査スルモ微生物ヲ認メルコトガ出來ナカッタガ夏季一ヶ月餘リ埃及ニ旅行シテ歸リタル後チ再ビ結核ノ染色検査ニ從事セラレシニ前ニハ檢出セザリシ「メチーレン」青ニテ長時間染色シタ標本ヨリ一ノ桿狀菌ヲ發見シ得タルデアアル之ヲ反復スルニ結核性產物ノ塗抹標本ニノミ認メテ非結核性ノモノニハ一モ發見シナイノデアアルガ此ノ桿狀菌ガ果シテ結核ノ病原體ニ相違ナキカ否カニ就テハ先生ガ既ニ以前ノ發見ニ於テナサレタル方法即チ陰影寫眞ヲナサントシテ古キ「メチーレン」青ニ染色シタ結核ノ塗抹標本ヲ「ビスマルク」褐ニテ複染シ鏡見シタ時ニコッホ先生ハ驚喜セラレタ即チ褐色ニ染リタル材料中ニ小桿狀菌ハ尙ホ青色ニ染リ居リタル事ニシテ之ニ依テ今ヤ菌體ヲ頗ル容易ニ認識シ得ルニ至レリ然ルニ復ビ結核材料ニ就テ新ラシキ「メチーレン」青溶液ニテ二十四時間染色後「ビスマルク」褐ニテ複染スルニ此ノ場合ニハ桿菌ノ姿ヲ見ルヲ得ズ誠ニ不思議ニ思ハレテ前ノ古キ「メチーレン」青液ニテ染色シテ見ルト確カニ染色證明セラレルコトカラ古キ色素中ニハ此ノ桿菌ヲ染色スルニ特殊ノ能力ヲ有スルモノアリト考ヘラレタ。丁度作業室ノ空氣中ニハ安母尼亞ガ多ク含マレ居ルカラ色素液ガコレヲ吸收シタ爲メデナイカト考ヘ新ラシキ「メチーレン」青溶液中ニ少量ノ安母尼亞ヲ加ヘル事ニ依テ染色ニ役立つ可シトノ考ヲ以テ實驗シタ結果ハ豫想通りデアツタガ尙ホ精細ニ研究シテ結果安母尼亞ノ作用ハ強「アルカリ」デアルト云フニ過ギナイ事ヲ確メ遂ニ苛性加里苛性曹達ヲ加ヘルニ由テ同一作用ヲ認メラレ適當ノ色素液ヲ案出サレタノデアアル。

ニコッホ先生ハ約半年ノ間最モ刻苦研鑽シ此ノ菌ノ培養ニ成功シ尙ホ且ツ此ノ純培養ヲ以テ動物實驗ヲナシ同一ノ病的變化ヲ起スコトヲ證明シ結核菌ヲ以テ結核病原トシテ毫モ疑フ餘地ナキ確證ヲ得テ一八八二年三月二十四日ベルリン醫科大學生理學教室ニ於テ特ニ先生ノ爲メ開カレタル生理學會ニ Unter Tuberculose ト云フ演題ノ下ニ發表セラレタ。

ニコッホ先生ガ斯カル大發見ヲ伯林大學會ニ於テセズシテ生理學會ニ於テナサレタ事ハ次ノ如キ次第デアアル。

先生ハ一八八〇年即チ三十八歳ノ時始メテ獨逸帝國衛生局ノ醫官ニ任ゼラレタルガ其ノ當時伯林醫會ノ會長ニシテ又タ醫界ニ於テ宛然王者ノ如キ大勢力アリシ病理解剖家ルドルフ、ウイールヒョウ氏ト善カラズシテ大ニ壓迫セラレタルニ基ケリ。

コッホ先生ノ演説ヲ聞カントシテ伯林ノ有名ナル學者ハ彼ノウイールヒヨウ氏ヲ除ク外ハ殆んど一堂ニ集リタリ。又ハ列席シタル學者中ニハ是迄反對シタ者モマザリシニ唯一人ノ討論者ナク何レモ驚キト感嘆トヲ以テ其ノ發見ヲ認メザルヲ得ザリシハ實ニコッホ先生ノ研究的頭腦ノ偉大ナルコトヲ證シテ餘リアリ是レ「コレラ」菌發見ノ前年ノ出來事デアル。

後チ先生ハ感染シタル身體ノ結核菌ヲ化學藥品ニテ繁殖防止ヲ企テラレ大規模ノ實驗ヲナサレ大ニ努力セラレシガ不成效ニ終リタリ、トハ雖モ近來歐洲ニ於テ殆ど同様ノ實驗ヲ再ビ繰リ反ヘサレテアルモ亦時代ノ進轉ト云フベシ。

先生ニ依テ結核「モルモット」ハ生菌死菌ヲ問ハズ是等ノ接種ニ對シ一定ノ反應ヲ呈スルコトガ健康「モルモット」ト異ナレルヲ確メラレ次デ一八九〇年「ツベルクリン」ノ創成アリタリ即チ同年伯林ニ於テ開カレタル第十回萬國結核會議ニテ發表セラレタル「ツベルクリン」ノ發明ハ一時結核患者ヲ伯林ニ來集セシメシガ其ノ成績ハ人ノ豫期ニ副ハザリシヲ以テ幾多ノ非難ヲ生ゼシト雖モ冷靜ナル研究ノ結果結核ノ治療上優秀ナルモノタルヲ認ムルニ至レリ。此ノ發見ハ唯ダ結核ノ療法ノミナラズ實ニ傳染病ノ療法ニ一新機軸ヲ與ヘタルモノナリ。其ノ後一八九七年ニハ結核菌體ヲ T. O. TR ニ分チテ新「ツベルクリン」(T. R)ヲ發表シ一八九〇年ニハ最新「ツベルクリン」ヲ又タ晩年ニ至リテ無蛋白「ツベルクリン」ノ發表アリ何レモ代表的ノ新製劑ニシテ其ノ間幾多ノ學者ガ多數ノ類似セル藥品ヲ出セシト雖モ殆んど之ガ模倣ニ過ギザル感アリ誠ニ先生ノ研究ハ時代ヲ指導スルノ光明ナリ人牛結核菌型別ノ如キ、牛結核ノ病毒ノ排泄ハ人ノ結核ニ向テ餘リ重要ナラズ人ノ結核ハ結核患者ノ排出スル痰中ノ結核菌ニ依ツテ惹起スルモノニシテ之ヲ以テ最モ危險ナリトスト理カレシハ實ニ卓絶シタル意見ニシテ結核豫防上意味深長ナリト謂フベシコッホ先生逝キテ四年目ノ千九百十三年十月開カレシ第十一回國際結核會議ハ各國共結核豫防ニ向テ大努力ヲナシ療養所竝ニ勞働保險問題ニ全力ヲ注グク決定シ又吾國ニ於テモ近時結核ノ豫防ニ官民協力シテ努力シツ、アリ而シテ斯學者ハ結核ノ豫防治療ニアラユル手段ヲ以テ研究シ年々幾多ノ業績ヲ發表セラレツ、アルハ誠ニ人生ノ幸福ノ爲メ意ヲ強ウスト雖モ最後ノ目的ハ尙前途遼遠ナリ吾人等ハ益々努力シ救世ノ目的ニ副ンコト切ニ望ム次第デアル。